

## 日常の茶事

八木 信男

私が結婚したとき、もっとも尊敬する恩師に乾杯の発声をお願いした。恩師が話された内容は今でも覚えている。夏目漱石の言葉に「日常の茶事を愛せよ」という言葉があり、それが幸福に繋がるという話だった。

なるほど、生きていくにはお茶を愛することが大切なのだと思い、それ以来、ずっとお茶を入れることを大切にしてきた。どこに行っても、どんな会議でもお茶が出されていないと、自分から率先してお茶を入れた。

お茶がある会議とない会議では、出席者のストレス度が違うのではないかと思うことがある。「お茶も出ないのか」と思う出席者が一人でもいれば、その会議はうまく運ばない理由を一つ抱えることになるからだ。

仕事以外の趣味の場でも、お茶を入れることを大切にしてきた。登山が趣味であるが、あるときヒマラヤ登山へ行く機会あった。夜明け前は氷点下20度の世界。私は食堂となるテントに誰よりも早く起きて行き、お湯を沸かした。温かいお茶が入る頃、仲間がテントにやってきてお茶をすすりながら温まる姿を見て満足したものだ。その甲斐あってか、登山は遭難者も出さず無事成功した。

茶番、茶化す、無茶苦茶、お茶を濁すなど、お茶はあまりよい引き合いに出されないが、日本人はお茶を大切にしてきた。

50歳を越えて、知人の披露宴で乾杯の発声を依頼されたので恩師の「茶事を愛せよ」という言葉をそのまま使おうと思った。しかし30年前のことだから不安になり、この言葉の出典を調べた。すると、夏目漱石の言葉ではなく、芥川龍之介の「侏儒の言葉」という著書の中の言葉であり、茶事ではなく「琐事」を愛せよと書いてあった。おまけに、「琐事に苦しまなければならぬ」とも書いてあった。

30年近く、琐事を茶事と聞き間違えて生きてきたが、良い聞き間違いではなかったかと我ながら感心している。

知人の披露宴では、「お茶を入れることを大切にすれば幸福につながる」と言うことにした。